

福岡大学筑紫病院外科における大腸癌補助化学療法の実状

山本 希治, 三上 公治, 石橋由紀子,
永川 祐二, 東 大二郎, 二見喜太郎,
前川 隆文

福岡大学筑紫病院 外科

要旨：当院で大腸癌に対し、治癒切除術（R0）を行った症例に対する補助化学療法のアドヒアランスを調べ、治療における問題点を検討した。114例が補助化学療法の適応であったが、実際に補助化学療法を行った症例は61例（53.5%）（stage III結腸直腸癌46例；stage II再発リスク高い結腸癌15例）であった。非施行の理由で最も多かったのが高齢であった。使用した抗癌剤はS-1（32例）、UFT（18例）、UFT/LV（5例）、capecitabine（3例）、S-1/CPT-11（3例）で、6ヶ月の完遂率は72.1%であった。完遂できなかった主な理由は、有害事象（65%）であった。治療医は有害事象を速やかに把握し、有害事象に対応し速やかに治療し、必要に応じてレジメ内容を変更することが必要である。

キーワード：大腸癌, 補助化学療法, アドヒアランス, チーム医療